ISSN 2189-8731

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.74　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2017 年 10 月

主な記事

平成 28 年度に行った自己評価・外部評価について（河合　渓）　p1
学生奮闘記「なぜ島に関心をもつのか～島を活性化する意義」（丸山麻子）　p3
フィールドこぼれ話「海を測る２つの困難」（中村啓彦）　P11
連載　とうがらしに旅して　第十五回「花岡胡椒（二）」（山本宗立）　p12

平成 28 年度に行った自己評価・外部評価について

国際島嶼教育研究センター長　河合　渓

国際島嶼教育研究センターは平成 22 年に前身の組織である多島圏研究センターから改組され現在に至っている。第二期中期計画・目標を終了したということで、前田芳實学長より本センターの自己評価を行ったのちに外部評価を受けるようにというご意見をいただいた。ここでは外部評価委員会の内容等を報告させていただきます。

外部評価に先立ち、本センターで自己評価書を作成し外部評価委員に提示し、これをもとに評価をしていただいた。外部評価委員会は平成 28 年 11 月 11 日に大学院連合農学研究科会議室三階において開催された。外部評価委員会は、宮田篤郎委員長（鹿児島大学研究推進担当学長補佐）、広崎宏委員（独立行政法人国際協力機構 JICA 九州所長）、児島愛之助委員（公益財団法人日本離島センター専務理事）、中俣均委員（日本島嶼学会会長、法政大学沖縄文化研究所所長・教授）、東美佐夫委員（奄美市総務部長）より構成された。本センター関係者として、私以外に専任教員の高宮広土教授、大塚靖准教授、山本宗立准教授、そして、桑原季雄教授（プロジェクト部会長）、仲谷英夫教授（出版広報部会長）、寺田竜太教授（交流企画部会長）にも参加していただいた。

外部評価委員会当日は宮田委員長、前田学長のあいさつの後、私より本センターの自己評価の説明を行い、外部評価委員より質疑応答を受け、その後、外部評価委員による協議が行われた。

外部評価委員からは、本センターは鹿児島大学において特色のあるセンターであると高く評価を受けるとともに、そこでの研究活動や教育活動について十分評価していただいた。また、この少し前に本センターが奄美市に設置した奄美分室を通した地域との連携が「2017 年地域研究コンソーシアム地域連携賞」を受けていたこともあり、地域での活動においても高く評価していただいた。その一方で、鹿児島大学は「主として地域に貢献する大学」として地域活性化への取り組みへの一層の努力を進めることとしており、この観点からより一層の地域貢献活動を行うことの必要性が指摘された。同時に、このような地域貢献への取り組みを行う時の

大学全体としてのバックアップの必要性も指摘された。

本センターの活動は専任教員及び外国人客員教授、学内兼務教員、学外協力研究者の活動が総合されたもので、これらのネットワークから多くの成果をあげてきた。今回の自己評価書にも兼務教員の業績の項目を作成したが、外部評価委員からも本センターの活動の高さ維持していくシステムの一部として高く評価していただいた。また、外国人客員教授は、毎年度に世界の優秀な島嶼研究者が鹿児島大学に滞在し、多くの共同研究やプロジェクトを推進してきた。私が兼務教員と共にフィジーで研究を行なっているのも、本制度を利用し南太平洋大学から来た多くの優秀な研究者達と話し合いを進めた成果である。これは、私だけでなく多くの兼務教員にとっても同じ事であった。そのため、学内外研究者からこの制度の重要性とその成果がもたらしてきた鹿児島大学の国際化への貢献が高く評価されていた。しかし、外部評価委員からは、この制度に対してはその学術的成果や国際貢献に対しての評価は非常に高かったが、一層の地域貢献参加の必要性とより目に見える形での成果を示すことの必要性が指摘された。そのため、上記の指摘と共に財政的な理由から、残念ながら本制度は本年度をもって終了することになった。

本センターでは外部評価を通して様々なご意見をいただいた。これを経て、本センターは研究推進機構に入り新たな方向に進みつつある。今後も様々なご意見を真摯に受け止め、活発な活動を進めていきたいと考えている。

外部評価委員会であいさつする前田芳實学長

外部評価委員

学生奮闘記

なぜ島に関心をもつのか～島を活性化する意義～

丸山麻子（鹿児島大学人文社会科学研究科）

このたび、縁があって先輩方が出稿してきた本紙に掲載させて頂く。本稿では、島に関心を持つこと、活性化することの意義を考える。私が島に関心を抱いたのは鹿児島に進学してからで、手付かずの自然のある島にであうことを楽しみにしていた。しかし機会がなく、学部時代に香川県の小豆島に勉強を教えるボランティアで訪問したのみで、島を視察するために訪問したのは大学院に入学してからだ。大学院の講義で硫黄島と中之島へ、そして集中講義で海外の島を訪ねた。その後も、島への関心は止まらず、今年の夏は、今は無人島である宮崎県にある大島を訪れた。講義で訪問した島については、島嶼研のホームページに詳細が掲載されているのでそちらを参照されたい。本稿では、無人島となった大島の現在について述べ、島にそして島の活性化に目を向ける意義を考える。大島は、宮崎県の南部に位置する自然豊かな島だ。この島ではイセエビ漁が盛んで、最盛期には住民が 400 人いた。しかし、昨年ついに唯一の住民が島を去り、無人島になった。無人島となった島は、所有者がある家も含め殆どの家が荒れ果てていた。街灯やガードレールも崩れたままだ。ただ電気は走り、水は湧き水がでているので、住めないこともない。昨今、日本では島のみならず、多くの地域で過疎化が進んでいる。過疎化を食い止めるべく、地域活性化が言われている。なぜ活性化すべきなのだろうか。それは、他にも理由はあるが、一つには伝統文化の継承が考えられる。一度無人になってしまった島で再び生活するために物資の面などは手配ができたとしても、長年根付いてきた伝統文化を取り戻すことは、難しい。文化は人々の生活を豊かにするために、そして心のよりどころとして欠かせない。もし文化がなければ、コミュニティも生まれず、人々は単独でそれぞれの生活を営み、トラブル発生につながる。また、無人島になると治安の問題もある。空き家が犯罪の温床となる可能性がある。それを防ぐために、我々は住みやすい島を作り永住者を増やすべきだ。その第一歩として様々な専攻の学生が島を視察し議論する機会がある島嶼研の講義は大変意義深い。数回しか島を訪問してはいないが、どこの島もそれぞれ独自の古きよき文化、歴史、時を忘れさせる自然があり、それが私を自然と島へと足を向けさせ、とりこにしているのかもしれない。まずは、私の島への関心を高めてくれた島嶼研の講義の受講を強くおすすめする。

講義で硫黄島を視察

無人島になると行政の手も及ばない

国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 176 回　2017 年 3 月 13 日

なぜ私は首狩（くびかり）を研究するのか？

山田仁史
（東北大学大学院文学研究科）

私は 2015 年、『首狩の宗教民族学』（筑摩書房）を刊行し、人類諸社会において過去に行われてきた首狩（くびかり）という習俗の諸相、とくに宗教的側面についてくわしく論じた。今回の発表では、本書の概要をざっとおさらいした上で、その後の研究の展開について述べるとともに、このような文化現象を研究するにいたった動機とその意義について、あらためてお話ししたい。

多くの人が驚くのだが、首狩慣習は狩猟採集民にはほぼ皆無であり、むしろ焼畑農耕民にひろく行われてきた。とりわけ東南アジア大陸部と島嶼部では 20 世紀前半までこれが盛行し、多くの類似点を示している。狩ってきた敵の頭部が自分たちの村の守護者になり、農耕における豊穣、狩猟の成功、女性の多産や病気の駆逐を確保してくれる、という観念が広汎に見られたのである。

日本史上においても、合戦の中で「首取（くびとり）」や耳鼻削ぎといった行為がなされたことは、よく知られている。そのことは、本書の後に出版された清水克行『耳鼻削ぎの日本史』や室井康成『首塚・胴塚・千人塚』（いずれも洋泉社、2015 年）に見られるとおりだ。同じく本書の後、ラーソン『首切りの歴史』の邦訳も出た（河出書房新社、2015 年）。冒頭で言及される南米ヒバロ（シュアル）族の「乾し首」をめぐる諸観念も、首狩と多くの共通点を持っている。

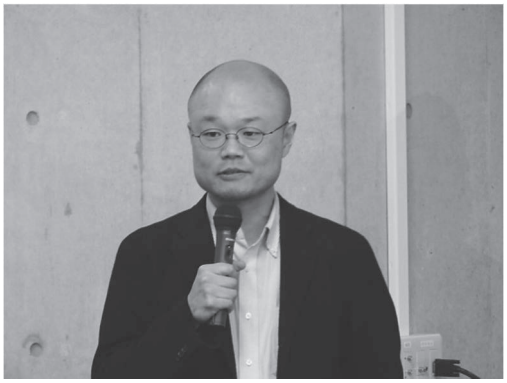
さて、なぜ私は首狩を研究するのか？それは、現代日本社会の常識から遠く隔たった物事にこそ、人類の本質を知る手がかりがあるのでは、と思うからだ。人命の軽重についての見方がいかに変化したかは、一つの驚異である。

第 177 回　2017 年 4 月 17 日

日本海開裂と日本列島の誕生―もう一つの物語―

鹿野和彦
（産業技術総合研究所地質調査総合センター）

日本列島主部は、大陸から分離して現在の位置に移動してきた火山弧であり、日本海は、その過程に伴って火山弧の背後に形成された凹地である。これは、1915 年に発表された Wegener の大陸移動説に接した寺田寅彦らがいち早く


山田仁史先生

鹿野和彦先生

唱えた説で、長い間、地向斜造山運動論の中に埋もれてしまっていたが、1980 年代になって、日本列島各地の古地磁気方位の変遷に基づいて西南日本の時計回りの回転と東北日本の反時計回りの回転によって日本列島が移動したとする説が発表されると広く受け入れられるようになった。とはいえ、移動の時期と移動プロセスの詳細については依然として議論が絶えない。それは、日本列島が大陸から分離移動した時期の地層と目されるグリーンタフについて、その年代を確認し、そこに記録されているはずの地質プロセスを読み取ることがむずかしかったためである。火山岩相解析や信頼性の高い年代測定法を導入して行われた最近のグリーンタフ研究から見えてくる日本海開裂と日本列島誕生についての新たな見方について語る。

第 178 回　　2017 年 5 月 29 日

魚介類のブランド化の取り組みを考える：大分県「かぼすブリ」を事例に

鳥居享司
（鹿児島大学水産学部）

漁業経営は厳しさを増している。川下決定の価格形成が指摘されて久しく、価格問題に悩む漁業者は多い。こうしたなか、いわゆる「ブランド化」の取り組みによって漁家経営振興を目指す取り組みが、離島はもちろん本土でも散見される。鰤王・鯛王（東町漁協）、海の桜勘（垂水市漁協）、菜の花カンパチ（山川町漁協）、

鳥居享司先生

ねじめ黄金カンパチ（ねじめ漁協）などにみられるように、名前のついた魚介類は多数存在する。その一方で、通常の養殖業に比べて遙かに高値で取り引きされるものはほとんど見当たらない。「ブランド化」の取り組みによって生産コストは上昇する一方で、販売価格にそれを転嫁できないケースが相次いでいる。「ブランド化」の取り組みは、漁家経営を一層厳しいものにしかねないのである。

本報告では、差別的な価格形成に成功する「かぼすブリ」（大分県）の事例を取りあげ，差別的な価格形成に成功した要因について明らかにしたい。なぜ、「かぼすブリ」は差別的な価格形成に成功したのだろうか。その背景には、良質な養殖ブリを生産しようとする生産者の努力はもちろん、生産計画を練る行政、販路開拓に邁進する漁協や市場関係者の努力があった。

第 179 回　　2017 年 6 月 19 日

海の人類史－環太平洋に進出したヒトと島嶼適応

小野林太郎
（東海大学海洋学部）

私たち人類は、アフリカ大陸の森林地帯で誕生した。そんな私たちはいつ海と出会い、また海を利用するようになったのか？日本食に欠かせない魚を食べだしたのはいつ頃なのか？本報告ではそのような素朴な疑問に対し、ヒトと海の歴史を人類史的な視点から再検討してみたい。具体的には、私たち新人（ホモ・サピエンス）を含めた人類誕生の地とされるアフリカの事例、さらに私たちの海洋適応がもっとも進んだ可能性のある環太平洋圏における島嶼域の事例を中心に検討していく。とくに近年、世界最古の貝製釣り針が発見された琉球列島や、カツオ・マグロ等の外洋魚類を対象とした最古の利用痕跡が発見された東インドネシア域の事例、また新石器時代以降に中国南部や台湾方面から、ポリネシアのハワイやイースタ島、

ニュージーランドをふくむ南太平洋への移住・拡散に成功したアジア系集団の島嶼・海洋適応に関する最新の研究成果を、報告者自身の研究やフィールド体験を交えつつ紹介する。

第 180 回　　2017 年 7 月 10 日

オキナワウラジロガシ・スダジイ林の維持機構

鵜川　信
（鹿児島大学農学部）

天然林は、野生生物の生息地となることから、生物多様性の維持に大きく貢献している。奄美諸島でも、アマミノクロウサギをはじめとして、ルリカケスやアマミトゲネズミ、アマミエビネなど多くの固有種・絶滅危惧種が森林を生息地としている。そのため、これら森林生態系の保全は必須の課題のひとつであるが、それを行う上で、天然林を形作る優占種個体群の維持機構の理解は必要不可欠である。本報告では、徳之島のオキナワウラジロガシ・スダジイの天然林を対象に、両優占種個体群の維持機構について明らかになったことを紹介し、これら天然林の保全の方向性について検討したい。具体的には、奄美諸島におけるオキナワウラジロガシ・スダジイ林の位置付けを紹介したのち、オキナワウラジロガシとスダジイの空間分布と個体群動態について研究成果を報告し、台風の常襲地である背景を踏まえつつ、当該天然林の維持機構を示す。これらの知見をもとに、当該天然林の保全の方向性を議論したい。

鵜川　信先生

研究会で奄美分室と Skype でつないでの討論風景

お知らせ

（1）研究調査

国際島嶼教育研究センターでは「島はひとつの世界」という概念のもと、「多島域における環境変動に対する適応」というテーマで国内外の島嶼部で研究調査をおこなっています。

プロジェクト「ミクロネシア地域における自然・社会環境と人々の生活に関する調査」

目的：　ミクロネシア地域ではグローバリゼーションや気候変動の影響を受け、伝統的な社会の崩壊とともに自然・社会環境が悪化している。本地域の島嶼国は環海性・隔絶性・狭小性・分散性という地理的環境としての困難性を抱え、脆弱な経済からの脱却は容易なことではない。しかし、人々は先進諸国の政策に翻弄されながらも、誇りを持っていきてきており、その生活の多様性は尊重されるべきである。本研究の目的は、ミクロネシア地域における自然・社会環境の変化がどのように個人の生活に影響しているのかを明らかにするとともに、この地域の生活改善策の提言を行う。

調査地：ミクロネシア連邦ポンペイ州

調査期間：平成 29 年 8 月 1 日～9 日

メンバー・調査内容

梁川英俊（鹿児島大学法文学部）

Research of local languages and music culture in Pohnpei

高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

How much do they know about prehistory of the islands

河合　渓（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

Shell colour polymorphism in populations of the intertidal gastropod *Nerta plicata*

山本宗太（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

Ethnobotanical study on crops in Pohnpei State

大塚　靖（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

Survey of mosquito container in Pohnpei State

カウンターパートとの打合せ

ボートで Takaieu 島へ

先史時代について聞き取り調査

蚊の幼虫が生息する空き缶

（2）着任

外国人客員准教授としてニュージーランド・ユニテック工科大学の PAPOUTSAKI Evangelia （パポサキ　エバンゲリア）氏が 7 月 3 日に着任いたしました。研究テーマは「奄美群島における通信環境のマッピング」、専門は「社会科学」で、2017 年 12 月 15 日まで滞在予定です。

研究会・大学院講義で発表する PAPOUTSAKI 准教授

（3）国内客員研究員制度の開始

平成 29 年度から、国内客員研究員の受け入れを開始しました。本制度は、本センターが蓄積してきた国際的な研究ネットワークや国内外の「島」に関する研究関連図書、統計資料、そして奄美分室を供することにより、独創的な共同研究を推進し、「島」に対して貢献するとともに、国際発信力強化に寄与することを目指しています。今年度の研究員と研究テーマは以下のようになります。

タイプ I：奄美分室利用型

松野啓太（北海道大学大学院獣医学研究科）「鹿児島県島嶼地域のマダニ中の病原体網羅的探索」

タイプ II：島嶼研究推進型

新里亮人（伊仙町教育委員会）「琉球国成立過程解明に向けた考古学的研究」

鳥飼久裕（奄美野鳥の会）「高隅演習林における渡り鳥調査」

（4）教員免許状更新講習

平成 28 年度より国際島嶼教育研究センターの教員で、教員免許状更新講習を担当することになりました。平成 28 年度は奄美市で、平成 29 年度は徳之島天城町と奄美市で開催します。講習科目「島嶼の自然と人々」で、鹿児島県島嶼部を中心にアジア太平洋島嶼部における自然環境とそこに生活する人の持つそれぞれの多様性とその関係性について学際的な視点から講義します。

天城町での教員免許状更新講習の様子

（5）日本島嶼学会大会甑島大会の後援

2017 年 9 月 1～3 日に薩摩川内市里公民館において日本島嶼学会主催、薩摩川内市・薩摩川内市教育委員会・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター後援で 2017 年次日本島嶼学会甑島大会が開催されました。シンポジウムでは「島嶼地域を含んだ広域合併の現状と課題：周辺からの視線と中心からの視線」というテーマで、甑島の地元の方々と会員が議論しました。

シンポジウム会場の様子

フェリーターミナルでの島民による送別

（6）来年の国際島嶼学会のについて

2018 年の国際島嶼学会（the International Small Islands Studies Association : ISISA）は 6 月 10～14 日にオランダのテルスヘリング島で開催されます。詳しい内容などは国際島嶼学会の Website をご覧ください。

最近の出版物

『**The Osumi Islands**』Kawai K, Terada R. and Kuwahara S. eds, 108pp, 北斗書房　(March 2017)

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.38, No.1, 2017

Research Papers

Hidayat H. and Nagashima S.: Yakushima national park and world heritage: political ecology approach

Mottaghi A., Shimomura M. and Reimer J. R.: Seasonal abundance of Sphaeromatidae (Crustacea: Isopoda) from sandy beaches in Okinawa-jima Island, Japan

Occasional Papers

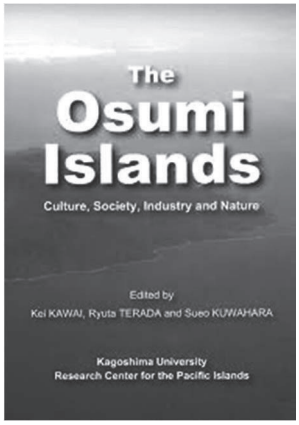
No.58 (March 2017)

Future Collaboration on Island Studies between Pattimura University and Kagoshima University. (Yamamoto S. and Leatemia J. A. eds)

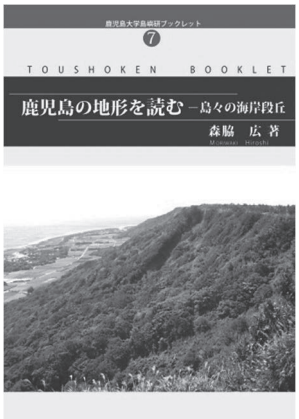
鹿児島大学島嶼研ブックレット

No.6「自然災害と共に生きる―近世種子島の気候変動と地域社会」佐藤宏之 (March 2017)

No.7「鹿児島の地形を読む―島々の海岸段丘」森脇　広 (March 2017)



『The Osumi Islands』



鹿児島大学島嶼研ブックレット No.6, 7

～フィールドこぼれ話～

「海を測る２つの困難」

中村啓彦（鹿児島大学水産学部）

私は、海洋物理学を専門に、かれこれ２０年間、水産学部で教育研究を行っている。海洋物理学とは、海水の運動と水塊の時空間変動を物理法則に基づいて理解する学問領域である。その応用として、気候学や水産海洋学がある。私は、かごしま丸を利用した海洋観測を教育研究の中心に据えている。その関係で、私のフィールドは、南西諸島周辺のフィリピン海から東シナ海である。さて、ここでは、海を測るという私のフィールドワークに関わる２つの困難について話をしてみたい。

まず１つ目は、物理的な理由による困難である。それは、水が電磁波を吸収することに起因する。つまり、海中では、宇宙空間のように、電波を利用して交信したり対象を遠隔的に観測したりするこができない。宇宙からやってくる電磁波（x 線、可視光線、赤外線など）を頼りに、宇宙物理学が発展してきたのとは違って、海の中からは情報が出てこないので、海洋物理学者は直接測りに行くしかない。海は広くて深く（平均水深は約 3800m）、全体を網羅するには及ばないのだが、ここに船舶を利用して現場で観測する私のような研究者の存在理由がある。

さて２つ目の困難は、そう思っても行けない海があるという点である。流体現象は連続した時空間上で因果関係をもつ。つまり、薩南海域の水温・塩分の時空間変動を解明したいと考えたら、因果関係を持つ上流の広範な海域を対象に原因を調査しないとならない。そこには、中国や台湾や韓国の水域がある。実はそれだけではなく、米軍の演習海域というものもある（もっと言えば、尖閣諸島や竹島もある）。他国の排他的経済水域や領海であっても、海洋法の関連条項に従って、事前に外交ルートで観測許可を要望すれば、当事国の支障のない限り観測は認められることになっている。しかし、これがどうも各国の国家主権が優先されて機能していない。私の思うところ、外交というのはお互いを牽制しあう方向に拍車がかかるようだ（これは科学的には正のフィードバック作用といえそうだ）。素人ながらに、もっと大人の外交（つまり、譲歩して後世で益を得る。これは負のフィードバック）はできないのかと考えるのだが、外交の最前線はそんな甘いものではないのだろう。

これらの２つは、原理的困難と人為的困難だが、どちらが早く克服可能かといえば、前者ではないかという気がする。人間の技術に対する発想は恐ろしいもので、海洋物理学者は、海中を 3 次元的に漂流する観測ブイで世界の海をくまなく埋めようとしている。2017 年 9 月現在、世界中に約 3800 個のアルゴフロートが投入されている。

「とうがらしに旅して」

第十五回　「花岡胡椒（二）」

宮迫治時さんのお宅を訪れると、地面に敷かれたネットの上で花岡胡椒の赤い果実が天日干しされていた。軒先には株ごと上下逆さにして干してある。花岡胡椒との初対面に心躍る。逸る気持ちを押え、サツマイモやラッカセイ、ソバの畑を見ながら歩くこと数分、宮迫さんの花岡胡椒畑に到着。花岡胡椒が畝に美しく並び、赤い果実が葉の隙間からこちらを覗いている。みずみずしい果実を見ると、無性にかじりたい衝動に駆られる。唐辛子研究仲間も同じ。早速そのままかじらせてもらう。甘い！ジューシーだ。そして一様に「辛くない」という。近藤会長や宮迫さんは怪訝な表情。そう、唐辛子研究者はどこかおかしなところがある。様々な唐辛子を生でかじることに慣れているため、一般の方とちょっと評価が違うのだ。もちろん「少し」辛いのだが、それが「辛くない」となってしまう。いずれにせよ、甘味が強いのは特徴的といえる。宮迫さんの奥様が、花岡胡椒の収穫の仕方を教えてくれる。果実を持って、ポキッ、ポキッ、ポキッ。いとも簡単に収穫していく。実際に果実をつかんで折り曲げてみると、萼（いわゆるヘタ）と果実がつながっているところから折れる。この形質もめずらしい。詳細は控えるが、花岡胡椒はいわゆる「タカノツメ」とは違う可能性が高く、日本の在来品種の中でもめずらしいタイプかもしれない。宮迫さんのお宅へ戻り、お話を伺いながらお茶とともに茹でピーナッツをいただく。もちもちしてとてもおいしい。その茹でピーナッツとサツマイモをお土産としてたくさんいただいた。花岡胡椒は2015年に「かごしまの伝統野菜」に選定され、2016かごしまの新特産品コンクールでは「花岡胡椒ギフトセット」が鹿児島県知事賞を受賞した。それもこれも、花岡地区の方々が花岡胡椒の栽培を続けてきた結果である。宮迫さんのように花岡胡椒の過去の栽培や利用をご存じの年配の方々に対して民俗学的な聞き取り調査を行い、花岡胡椒の歴史を分厚くすることで、花岡胡椒の魅力がより一層増すのではないだろうか。花岡胡椒の益々の発展を願う。（山本宗立）

編集後記

奄美市名瀬で小さな学会を開催し、古仁屋にある東大医科研の服部正策先生に「ハブ　ーその起源と現状ー」として特別講演をしていただきました。その講演で、沖縄本島や奄美にはハブ(*Protobothrops flavoviridis*)がいますが、奄美のハブは遺伝的には沖縄のハブより宝島にいるトカラハブ(*P. tokarensis*)に近いのだそうです。なので、奄美のハブの名前はトカラハブになるかもしれない、ということでした。見た目には奄美のハブとトカラハブはかなり違うんですがね。（大塚　靖）

島嶼研だより　No. 74　平成29年10月31日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
〒890-8580　鹿児島市郡元1-21-24
電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197
電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
WWW　http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html